

中國における日本詞研究について

萩原正樹

はじめに

唐・張志和の「漁歌子」制作（大曆九年、七七四）から僅か四十九年後の平安時代・弘仁十四（八二三）年、嵯峨天皇の「漁歌子」五関とこれに奉和した有智子内親王及び滋野貞主の作品七関が制作された。この計十二関が、日本における詞の嚆矢である。平安時代には他に、醍醐天皇の皇子兼明親王の「憶龜山」詞二関があり、その後江戸時代には複数の詩人による相當数の作品が残され、やがて明治期の三家（森槐南・高野竹隱・森川竹篔）とその周邊における詞の盛行へと及ぶのである。

詞は、言うまでもなく中國韻文の重要な一ジャンルであり、中國の文學狀況に目を配りつつ独自の發展をとげてきた日本漢文學にとって、もまた、決して無視することのできない分野であろう。だが、日本詞の歴史や諸相に關して日本で刊行された專著は、現時點では故神田喜一郎博士の『日本における中國文學』（『神田喜一郎全集』第六・七卷所收、同朋舎出版、一九八五・八六、初出は二玄社刊、一九六五・六

七）ただ一書にすぎない。論文もまことに寥々たるもので、全般に論考数の少ない日本漢文學研究においてもその少なさは際立っている。

ところが、このような日本における研究狀況と比べると、中國の日本詞研究の方が數段すすんでいるように思われる。中國で發表された論文や選注本等は、管見の及んだ範圍では下記の通りである。

○論文・書評等

夏承燾 論域外詞絕句九首 文獻第四號 一九八〇

周采泉 獨辟蹊徑的「域外詞選」 湘江文學一九八二年十一期

張珍懷 《日本三家詞箋注》前言 文獻第十五號 一九八三年三月

施議對 東瀛詞壇傳佳話——關於中國填詞對日本填詞的影響 福建

師範大學學報（哲學社會科學版）一九八三年一期

張珍懷 日本的詞學 詞學第二輯 一九八三年十月

彭黎明 日本的詞學研究 河北大學學報（哲學社會科學版）一九八五年二期

彭黎明 中日詞人交往事略 河北學刊一九八五年二期

彭黎明 讀「域外詞選」 文學評論一九八五年三期

蔡毅 明治填詞與中國詞學 學人第二輯 一九九二（蔡毅『日本

漢詩論稿』、中華書局、二〇〇七に再録）

熊豔娥 花開異域—淺論日本幕府末期詠物詞 沙洋師範高等專科

學校學報二〇〇五年二期

○選注本

夏承燾選校、張珍懷・胡樹森注釋 『域外詞選』 書目文獻出版社

一九八一年十一月

彭黎明・羅姍選注 『日本詞選』 嶽麓書社 一九八五年十一月

張珍懷箋注、黃思維校訂、施議對審訂 『日本三家詞箋注』 澳門

中華詩詞學會 二〇〇三年一月

○翻譯

施議對譯 「填詞之濫觴」（譯自日本填詞史話上） 『域外詞選』附

載

程郁綴・高野雪譯 『日本填詞史話』 北京大學出版社 二〇〇〇

年十月

數量は決して多くはないが、日本と比べると充實していると言えるであろう。なかでも特に選注本が三種出版されていることは、注目すべきである。

このような中國における日本詞研究は、同じく日本の詞に關心を寄せている我々にとって非常に有益であり、いわば大變ありがたい仕事である。まさに詞の本場である中國の學者たちが、日本人の制作した詞を評價して研究を行っていることは、うれしくまた誇らしいことで

あり、日本の研究者の一人として彼らに深甚なる敬意と謝意を表した。ただあらゆる研究成果がそうであるように、中國での日本詞研究においても、時を隔ててみれば改めなければならない見解や、補うべき資料などが存在することも事實であろう。

小論では、中國における日本詞研究の第一人者であった夏承燾氏と日本との関わりや、中國の研究者による日本詞評價等を紹介し、あわせて中國の日本詞研究、特に選注本についてその問題点を指摘してきた。中國の學者による日本詞研究の過去と現在を振り返ることによって、今後の日本詞研究にとって有用なヒントを得たいと思うからである。

一 夏承燾氏の日本詞研究

中國において最初に日本の詞を高く評價したのは、おそらく夏承燾氏（一九〇〇—一九八六）であろう。夏承燾氏によって日本詞の價値が見い出されたことが、中國における日本詞研究のはじまりであると言つてよい。

夏承燾氏は、周知のとおり『唐宋詞人年譜』や『姜白石詞編年箋校』等の著書で知られる、著名な詞學研究者である。その夏承燾氏が比較的早い時期から日本の漢學に關心を持っておられた様子を、氏の日記である『天風閣學詞日記』（『夏承燾集』第五、七册所收、浙江古籍出版社・浙江教育出版社、一九九七¹）によってみる事ができる。

『天風閣學詞日記』の中で最も早く登場する日本の書物は、鶴見祐輔氏の『思想・山水・人物』である。

〔一九二八年八月十六日〕

閱日本鶴見祐輔思想山水人物（魯迅譯）不忍釋手、攜枕上閱至息燈時。得一好書、心靈爽快、不可言喻。

鶴見祐輔氏は後藤新平の女婿で、戦前から戦後にかけての政治家・著述家として著名であり、また鶴見和子・俊輔の父親としても知られる。隨筆集『思想・山水・人物』は、大日本雄辯會講談社から大正十三（一九二四）年に出版された。翌一九二五年四月以降、魯迅による書中の諸篇の翻譯が『民衆周刊』『語絲』等の雜誌に掲載され、計二十篇を収めた單行本が一九二八年五月に上海北新書局より刊行される。夏承燾氏が讀まれたのは恐らくこの北新書局版であろう。これを讀み出した夏氏は手から離すことができず、ついに枕邊まで持ち込んで讀みふけたという。「得一好書、心靈爽快、不可言喻」とあることく、その内容に高い評價を與えておられる。

直接中國文學に關わる書物では、鹽谷溫氏の『中國文學概論講話』を讀まれている。

〔一九二九年九月十八日〕

閱日本鹽谷溫中國文學概論講話譯本。鹽谷溫曾游中國、從葉煥彬學詞曲。

詞學を專攻されている夏承燾氏は、葉德輝（字煥彬）に詞曲を學んだという鹽谷溫氏の書物に大いに關心を持たれたのであろう。だが翌九月十九日の日記には、

〔一九二九年九月十九日〕

閱中國文學概論講話填詞篇、無精到語。

と記されており、期待はずれであったようである。

その後も日記には、

〔一九三四年十二月二十九日〕

閱日本岡田元規之唐宋八大家醫傳。

〔一九三五年七月二十六日〕

閱日本今關天彭論清詞書、彷彿可解。

〔一九三六年三月十日〕

閱日本足立喜六著長安史蹟考（商務版）。

など、日本人の著作が登場している。「一九三五年七月二十六日」の「今關天彭論清詞書」とは、今關天彭氏著『清代及現代の詩餘駢文界』であろうか。さらに一九四〇年の冬には、

〔一九四〇年一月二十五日〕

又見日本東方學報有漢書補注、補宋代皇城司考等文。彼邦人治我國之學蔚爲風氣、而我乃自視爲芻狗、可嘆可嘆。

〔二月十四日〕

于欣夫處見日本東方文化研究院所印尙書正義定本一冊。彼邦人乃有志整理十三經注疏、欲越俎代庖矣。

〔二月十七日〕

今日之江上二課、并爲新生指導國文系課程、引日本人治漢學各書相警戒。

との記事が見え、「東方學報」所收の論文や『尙書正義』を御覽になつて、日本漢學の研究水準の高さに驚嘆しておられる。當時は既に日中戦争の始まっていた時期であるが、夏承燾氏は狹隘な偏見にとらわれ

ることなく、むしろ「而我乃自視爲芻狗」と書かれているような謙虚な姿勢で日本人の研究を評價されているのである。夏氏はその頃之江大學に勤めておられ、二月十七日の日記によれば、その學生たちに日本人の研究を紹介して「諸君も日本人に負けないようにしっかりと勉強しなさい」というような訓示を垂れられたのではないだろうか。

戦後になると、特に京都の學者との交流が始まる。

〔一九五六年九月六日〕

得任二北函、謂日本東光雜誌刊有中田勇次郎之「姜夔」、「姜白石之梅」二文、不知内容如何、頗思訪得一看。此君又有中華唐宋六十家言行錄一書。

と、右の記事ではまず故中田勇次郎先生の姜夔に関する論文^⑤に關心を寄せられ、また一九五七年には、

〔一九五七年二月十二日〕

遇陳繼生、出示檢生來片、謂日本京都大學吉川幸次郎主編之中國文學報、有評介唐宋詞人年譜一文。日本居然有人讀此書、甚欲一見其所評。作一片問檢生何從見此。

〔二月十三日〕

晨作一函致日本京都大學吉川幸次郎、問其所編中國文學報評介唐宋詞人年譜文字、並問田中勇次郎所爲姜夔及姜白石與梅花論文。

〔二月二十六日〕

晨檢生寄來日本京都大學文學部中國語言中國文學研究室所出之中國文學報第五冊、一九五六年十月刊、書評欄載清水茂評予唐宋詞人年譜一文。午後請葉作舟君講一過、燈下試譯三四頁。清水君讀

予書甚仔細、竝以詞學季刊所登予譜校閱、所論皆甚中肯、讚美亦無溢辭、日人治學謹嚴可見。當此國運迍邐之日、尙有人沈研學術、孜孜如此、亦令人感奮。

とみえ、二月十二日に龍榆生氏を通して、京都大學の「中國文學報」第五冊に「唐宋詞人年譜」の書評^⑥が掲載されていることを知ってぜひとも一見したいと思われ、翌十三日には吉川幸次郎氏に手紙を出して「中國文學報」や中田先生の論文について問合せをしておられる。

やがて二月二十六日朝に、龍榆生氏から寄せられた「中國文學報」を入手すると、その日の午後には日本語を解する葉作舟という同僚に頼んで書評を試譯し、清水茂氏の書評について「清水君讀予書甚仔細、竝以詞學季刊所登予譜校閱、所論皆甚中肯、讚美亦無溢辭、日人治學謹嚴可見」ときわめて高く評價されている。これ以降、清水茂氏と夏承燾氏とは「忘年の交わり」^⑦を結ばれることになるのである。

また、一九五九、六〇、六一年にも、

〔一九五九年六月十四日〕

得日本京都大學人文科學研究所平岡武夫寄來東方學報抽印本。平岡所著「唐長安の遺蹟調査と夏承燾氏の曲江池考」一冊、札録予所著「唐代曲江池小考」。

〔一九六〇年十二月十九日〕

日本林謙三寄來其新著三冊、「尺八新考」「博雅笛譜考」「伎樂曲の研究」。林君爲日本古樂研究專家、郭沫若譯其隋唐燕樂考、甚負盛名。惜不能讀其日文著作。

〔一九六一年四月十五日〕

晨過鄧恭三談、(中略) 又示日本入矢義高評鄧之誠之注東京夢華錄、列舉誤謬甚多。

という記載があり、日本の學者からの論考の寄送や友人との情報交換の場などから、日本人の研究業績に接し、その内容に注意を拂っておられる様子が窺えよう。

そして一九六五年六月二十三日の日記に、神田喜一郎博士が二玄社から出版された『日本填詞史話』の上冊を、神田博士より送られたことが記載されている。

〔一九六五年六月二十三日〕

上午接日本京都市左京區下鴨北園町七八號神田喜一郎航函竝「日本填詞史話」上一厚冊、函謂「日本填詞一道作者寥寥、江戸時代末期、野村篁園、日下部夢香輩風氣漸開、途徑始通、大抵憲章竹垞、祖述樊榭、學步雖陋、稍覺形似、或可以發一粲。厥後迫明治時代、森槐南、高野竹隱、高居壇坫、相競角技、自謂一時瑜亮、天下無敵也」云云。午後閱史話森槐南、高野竹隱二家之作、誠足令人斂手、此前各家有甚幼稚可笑者。其一〇二頁有述魏氏樂譜一章、知即林謙三所發現者、其著者魏皓、字子明、號君山、其先中土鉅鹿人、四世祖雙侯、通朱明之樂、崇禎中抱樂器避亂日本、皓傳其樂學、日本乃有明樂。樂凡八調、其器管四、絃三、攷擊四、其詞曲凡二百餘。書中提及林謙三所著明樂新考。神田函謂與姜亮夫不相見幾三十年、予問姜公、謂神田今年已七十餘、三十年前遇於巴黎、同治敦煌學、後著有敦煌學五十年、段玉裁年譜及兩繙流之音韻學、頃任京都大學文學研究所長。

神田博士の書函の内容を詳しく紹介し、またその日の午後には森槐南・高野竹隱の作品を讀まれ、「誠足令人斂手」と兩者の作品に高い評價を與えておられる。一方續いて「此前各家有甚幼稚可笑者」と記され、槐南・竹隱以前の特に江戸期の作品については、まだ作品が一定の水準に達していないことを指摘されている。また「魏氏樂譜」に關しても、大きな關心を持っておられたことが分かる。

翌六月二十四日の日記には、

〔六月二十四日〕

午後作神田喜一郎信、謝其寄贈日本填詞史話、竝贈與菩薩蠻一首。とあり、夏承燾氏がすぐに神田博士に返信を書き、「菩薩蠻」詞一首を贈られたことが記されている。以後兩者のやりとりは、

〔七月二十八日〕

得神田喜一郎十七日航函、囑寫前寄菩薩蠻詞、竝問榆生、圭璋住處。

〔八月二日〕

發題日本填詞史話及四聲繹說、曲江考與神田鬯齋。

〔八月三日〕

傍晚作神田鬯齋復、告學生欲譯日本填詞史話、請其書森槐南、高野竹隱唱和詞、附去寄林謙三詩二首。

と續くのである。

『天風閣學詞日記』に日本人の詞について記載されているのは、この六月二十三日の記事が初めてであるが、ただ夏承燾氏がこれ以前にはまったく日本人の詞について知っておられなかったかというところ、恐

らくそうではないのではないかと思われる。日本留學經驗の有る友人や、彼らが持ち歸った書物・雜誌等を通じて、日本人の詞や日本の詞學にもある程度關心を持ち、知識もあつたのではないだろうか。

一九二八年九月九日の學詞日記に、

「一九二八年九月九日」

鼎丞丈來、示日本人詩數本、囑代作一詩、挽日本大倉喜七郎^①。

と記され、日本人の漢詩集數冊を見たという。これらの詩集の中には、あるいは詞が含まれていたものもあつたかもしれない。

また森槐南については、黃遵憲「人境廬詩草續・懷人詩」中の注に「森槐南、魯直之子、年十六、兼工詞。曾作補天石傳奇示予、眞東京才子也」とあり、その名と多才ぶりは仄聞していたであらう。さらに、日本の書物や漢學に詳しい唐圭璋・龍榆生らからの影響もあつたのではないか。

だがやはり、夏承燾氏が本格的に日本の詞に興味を持たれたのは、神田博士の著書以降ではないかと考えられる。『日本填詞史話』上册刊行から十五年後の一九八〇年、夏氏は「文獻」第四號に「論域外詞絶句九首」を發表して、中國における域外詞研究の口火を切られ、翌一九八一年には内外を通じて最初の選注本である『域外詞選』を編纂された。神田博士が著書を夏承燾氏に送られ、詞學の泰斗である夏承燾氏がその内容を高く評價されたことが、中國における日本詞研究の、直接のきっかけであつたと言つてよいのではないかと思う。

二 中國人研究者の日本詞評價

次に、中國の日本詞研究者たちが日本の詞をどのように評價しているのかについて、紹介しておきたい。先に觸れたように、神田博士の『日本填詞史話』を讀まれた際、夏承燾氏は槐南・竹隱の作品を高く評價される一方、それ以前の作者については「此前各家有甚幼稚可笑者」とされていた。ただ、野村篁園と日下部夢香については、「江戸時代末期、野村篁園、日下部夢香輩風氣漸開、途徑始通、大抵憲章竹垞、祖述樊榭、學步雖陋、稍覺形似、或可以發一粲」と記されている。この評價は後年にも變わることがなかつたようで、一九八〇年の「論域外詞絶句九首」においても、江戸以前の作者については嵯峨天皇と野村篁園の二名のみを取り上げておられる。

まず嵯峨天皇について、夏承燾氏は次のように述べられ、日本詞の開山としての役割を評價されている。

日本詞學、開始于嵯峨天皇弘仁十四年（八二三）和張志和《漁歌子》五首、是爲日本詞學開山。上距張志和原作、僅後四十九年、迄今已有一千一百五十多年了。其時溫庭筠纔十歲左右。（夏承燾「論域外詞絶句九首」題解）

また野村篁園については、

野村篁園詞集中詠物之作甚多。詠食物有柑、笋、蠶豆、銀魚、蟹等、以姜白石、史梅溪刻劃之筆、寫江鄉風味、令人有蘊鱸之想。（夏承燾「論域外詞絶句九首」題解）

と記され、特にその詠物の作品について南宋の姜夔・史達祖に擬して

論じられている。篁園の詠物詞に關しては張珍懷氏も、

其詠物之作深得南宋姜、張、高、史之三昧。(張珍懷「《日本三家詞箋注》前言」)

と評されており、姜夔・史達祖に加えて張炎・高觀國の味わいも有しているとされる。そのほかにも、

他吸取了宋詩的曉明暢達、融合我國性靈詩派的清新機巧、形成自己的詞風特色、即構思新奇、形象生動、表意鮮明、細膩諧婉。(彭黎明「讀『域外詞選』」)

篁園學識淵博、才力過人、從《荷葉杯》這樣的小令、到最長的慢詞《鶯啼序》、幾乎諸調皆備、這在中外填詞史上都是極爲少見的。

他很善于使事用典、刻畫物象細膩生動、文辭豐贍、風格典雅。(熊豔娥「花開異域——淺論日本幕府末期詠物詞」)

と論じられるなど、野村篁園は中國の研究者からの評價が非常に高い。また日下部夢香に關しても、夏承燾氏の直接の評言は無いものの、その他の研究者によって、

他是一位遁世超塵的隱逸士、因此他的詞恬淡清雅。(張珍懷「《日本三家詞箋注》前言」)

夢香的詠物詞、則金針密綉、又諧沈約四聲、托旨似淡殊深、摛辭豔而不靡、追格碧山、繼蹤白石。(彭黎明「讀『域外詞選』」)

夢香學識淵博、喜歡填詞、以南宋姜夔、張炎等人爲學習對象、風格婉約、追求空靈、協音律、有寄托。(熊豔娥「花開異域——淺論日本幕府末期詠物詞」)

等と述べられ、特にその詞の「恬淡清雅」な風格や嚴密に音律に協つ

ている點が高く評價されている。

一方、田能村竹田については評價が分かれている。竹田は、日本で最初の詞譜である『填詞圖譜』二卷の著者であり、すべて六十九闋の作品を残す詞人でもあった。神田喜一郎博士は、竹田の詞學における功績や佳什を紹介された後に「わたくしはやはり竹田を以てわが日本填詞史上初めて出た本格的な作家と推したい」と述べている。ところが張珍懷氏は、

其《秋聲館集》有詞六十九闋、斯時漢詩作家亦兼能填詞。不僅能作小令、也能依譜填長調。惟皆在學步階段鮮見聲情并茂之佳作。

(張珍懷「《日本三家詞箋注》前言」)

と述べ、「まだ學習中の段階であり、音聲・情趣ともにすぐれた佳作がほとんど見られない」と、非常に厳しい評價を下しておられる。この厳しい評價の背景には、夏承燾氏の「此前各家有甚幼稚可笑者」という語の影響も考えられるかもしれない。後に觸れるように、夏承燾選、張珍懷・胡樹森注釋『域外詞選』の「日本詞」では、江戸以前の作者からは、日下部夢香と野村篁園の二名のみを選び、竹田やその他の諸家にはまったく言及されていないのである。

逆に彭黎明氏は、「讀『域外詞選』」において、次のように竹田の詞にきわめて高い評價を與えている。

在神韻、情辭和意境上、接近花間溫、韋和兩宋晏、秦、可見竹田承襲婉約詞風、根底匪淺。(中略) 不僅感情細膩、而且結構緊約、用語綿密沈著。(中略) 具有實質派婉約詞人的藝術特色。

竹田の作品を、『花間集』の溫庭筠、韋莊、また宋の晏殊(もしくはは

晏幾道)、秦觀に比し、さらに「質實派婉約詞人」の特色を有しているという。この「質實派婉約詞人」とは、南宋・吳文英を代表とする一派を指している⁽¹³⁾。吳文英は、「詞家之正宗」と言われる周邦彦の後継者と目され、後世の詞人や詞評家に重んじられた⁽¹⁴⁾。竹田の詞を、その吳文英の特色を有していると説くのであるから、彭黎明氏の語は最大級の讚辭であると言ってよいであろう。彭黎明・羅姍選注『日本詞選』では、田能村竹田の詞を三首載録している。

明治期の森槐南、高野竹隱については、中國の研究者いずれも評價が高い。まず槐南に關しては、

日人爲蘇、辛派詞、當無出森槐南右者。而其濃麗綿密之作、亦不在晏幾道、秦觀之下。(夏承燾「論域外詞絕句九首」)

其詞格律謹嚴、聲情流美、這是竹隱、竹磬所不能及的。(張珍懷「日本三家詞箋注」前言)

槐南的豪放風格、同蘇東坡、辛稼軒、李齊賢相比、更接近于蘇、辛。但槐南亦不乏濃麗綿密之作。(彭黎明「讀『域外詞選』」)

と論じられている。蘇軾や辛棄疾の作品のような豪快な作風にすぐれ、また豔麗な作品においても夏承燾氏は「亦た晏幾道、秦觀の下に在らず」と評される。さらに張珍懷氏は格律の謹厳なことにも注意され、竹隱や森川竹磬の及ぶあたわざるところとされている。また竹隱についても、

高野竹隱與森槐南齊名於明治年間之詞壇。竹隱早年詩學厲鶻(樊榭)、詞境亦相近。(夏承燾「論域外詞絕句九首」)

其詞清雋幽雅、也頗似樊榭風格。(張珍懷「日本的詞學」)

竹隱詞之本色、乃以畫眉之筆寫曠達之情、孤寂而清雅。(彭黎明「讀『域外詞選』」)

と評され、諸家いずれもその清雅な詞風を高く評價している。ただ森川竹磬に關しては、彭黎明氏が竹磬と竹山・竹垞とを比擬して、

竹磬詞則婉雅幽靜、(中略) 所以他的詞風還是接近兩竹(蔣竹山・朱竹垞)的。(彭黎明「讀『域外詞選』」)

と述べ、その詞風に高い評價を與えられているのに對して、張珍懷氏は、

竹磬是日本詞史上作品最多的一家。唯意境、字句多重複、他所抒寫的只是慨嘆自己家族的衰落、字句詞藻的運用、也未能完全消除兩國語言歧異所造成的一些障礙。(張珍懷「日本的詞學」)

と評して、竹磬が日本の詞史において最多の作品を残している詞人であることを特記するものの、意境や字句に重複が多く、またその詞にいわゆる和臭が見られることを指摘されており、槐南・竹隱よりも低く評價しておられるようである。この張氏の竹磬評には、先に擧げた田能村竹田に對する評價と同じように、夏承燾氏の考え方が影を落としていると思われる⁽¹⁵⁾。ただ、張珍懷氏は後に『日本三家詞箋注』を上梓され、槐南詞九十五首、竹隱詞八十六首と並んで竹磬詞九十九首に注を施されており、竹磬の作品を、槐南・竹隱よりは低いとしても一定水準以上のものとして取り扱っておられたと言えるだろう。

三 選注本三種について

冒頭に述べたように、中國では日本詞の選注本が三種出版されている

る。日本において日本詞は、一部の唐宋の詞選や日本漢詩の選譯本中に數首取り上げられているのみというのが現状であり、これと比べると中國での日本詞の扱いは格段に上回っていると言えよう。日本では、神田博士の『日本における中國文學』を繙く以外に、各時代の日本詞をまとまったかたちで閱覽することのできる書物は未だ存在していないのである。

中國の選注本三種、すなわち『域外詞選』、『日本詞選』、『日本三家詞箋注』は、いずれもそれぞれの編者が詞人や作品を選別して収録し、箋注を施したものである。『域外詞選』には、次の八家、七十四首が採録されている。

日下部夢香十首
野村篁園十五首
山本篤梁六首
森槐南二十一首
高野竹隱八首
徳山樽堂一首
北條鷗所七首
森川竹磔六首

『域外詞選』は夏承燾氏の選にかかる書物であり、當然ながらその採録基準には、夏承燾氏の日本詞人や作品に對する評價が反映している。夏承燾氏の「論域外詞絶句九首」には、日本の詞人として嵯峨天皇、野村篁園、森槐南、高野竹隱の四名が論じられており、『域外詞選』においても嵯峨天皇を除く三名の作品が、全體の半數以上をしめ

る四十四首収録されていて、篁園、槐南、竹隱に對する評價の高さをうかがうことができる。篁園の十五首に次ぐのは、十首採録されている日下部夢香である。先に觸れたように、日下部夢香について夏承燾氏は直接の評言を残していないが、『域外詞選』巻頭に十首録し、また特に設樂翠巖の「夢香詞序」をも附載していることからすれば、南宋の姜白石にも比せられる「恬淡清雅」な夢香の詞風を、相當に高く評價していたのであろう。また山本篤梁と北條鷗所の作品がそれぞれ六首、七首と、竹隱の八首に次ぐ収録數となっている點も興味深い。篤梁と鷗所の詞について、森槐南は「清麗可愛」「清新可愛」と評しており、夏承燾氏もその清秀美麗な詞風を愛されたのであろう。

一方彭黎明・羅姍選注『日本詞選』では、以下のごとく網羅的に日本の詞人と作品が紹介されている。

嵯峨天皇二首
有智子内親王二首
滋野貞主二首
兼明親王二首
林羅山一首
林春齋一首
林讀耕齋一首
林梅洞一首
林鳳岡一首
徳川光圀二首
祇園南海一首

中井竹山一首
細合半齋二首
市河寔齋一首
大窪詩佛二首
磯谷滄洲一首
村瀬栲亭三首
菅茶山四首
頼杏坪五首
頼山陽一首
梁川星巖二首
中島棕隱一首
菊舎尼二首
吉村迂齋二首
田能村竹田三首
河野鐵兜二首
日下部夢香十二首
野村篁園十七首
友野霞舟八首
薄井小蓮二首
竹添井井一首
長三洲六首
長梅外二首
辻青澗二首

戸田靜學一首
山本篤梁七首
北條鷗所七首
徳山樗堂二首
森槐南二十六首
高野竹隱十九首
森川竹磬二十三首
本田種竹二首
田邊碧堂一首
關澤霞庵三首
奥田抱生二首
金井秋蘋一首
久保天隨一首
鈴木豹軒一首
永井禾原一首

収録されているのは、嵯峨天皇の「漁歌子」から始まり永井禾原の「水龍吟」まで、すべて四十九家、百九十五首であり、本書は、編者の「前言」に「從九世紀初葉日本填詞開始至二十世紀初中葉爲止、其間一千多年中、日本主要詞人的代表作均選入。所選詞人作品以時間先後爲序、同時兼顧全貌、除重點選取著名詞人作品外、還兼收那些不甚出名、但獨具特色的詞人作品、讀者可以從中窺見日本填詞的傳統、發展和成就」と言うように、著名詞人からマイナーな詞人まで廣く網羅して、日本詞の全體像を理解してもらおうとの意圖を有していた。

『日本詞選』で最も多く採録されているのは森槐南二十六首で、これは、先述の『域外詞選』が槐南詞を最も多く採っているのと等しいが、第二位が森川竹磎の二十三首である点は、『域外詞選』と大きく異なっている。竹磎は、『域外詞選』では北條鷗所の七首より下位の第六位であり、六首しか録されていない。この竹磎詞の収録数の違いは、先に觸れたように、『日本詞選』の編者の一人彭黎明氏と、夏承燾氏との、竹磎に對する評價の違いに起因するものであろう。『日本詞選』

「前言」は「森川竹磎詞清婉、(中略) 追歩蔣竹山、朱竹垞詞格調。竹山詞追昔傷今、竹垞詞溫雅芊麗、竹磎詞則輕清淡雅」、また「森川竹磎根據萬樹《詞律》編成《詞律大成》二十卷、其中增補《大曲》一卷、比萬氏所著更爲完備」と述べるなど、竹磎の詞と詞學を非常に高く評價しているのである。

また張珍懷箋注、黃思維校訂、施議對審訂『日本三家詞箋注』は、

槐南、竹磎、竹磎の詞を計二百八十首收めている。

森槐南九十五首

高野竹隱八十六首

森川竹磎九十九首

以上の選注本三種は、本章冒頭にも記したように日本においては類書が存在しておらず、日本詞研究にとってきわめて價值が高いと言わなければならない。また三種には、いずれも各詞に箋注が附されており、この點も高く評價すべきである。だがあえて、三種の選注本の問題點を二點指摘しておきたい。

まず一點は、選詞の範圍についてである。

詞に限らず、およそ文學作品を選録するとき、母體となる數多くの作品の中から、編者の基準に従って特に優れた作品や重要な作品を選び出す、というのが基本的な作業となる。選録の母體である作品群は、通常は各作家の作品すべてであり、詞人の場合はそれぞれの詩詞集から、あるいは別集が無かったり内容が不足する場合は、諸書に掲載の作品を輯集して可能な限り全作品をまとめ上げたものから得られるであろう。その作品のすべてを一定の基準によって吟味し、基準を超えたものが選録の対象となるのであり、この作業を経ることで編者の詞人・作品の評價や見識を示すことができるのである。もし母體がすべての作品ではなく、既に何者かによって選ばれた後の作品群であった場合、すなわち編者の基準とは別の評價基準で選ばれた作品群が前段階にまざって、そこから編者が作品を取捨選擇したという場合、そのような選本は編者の識見を的確に示せないばかりでなく、選集として不完全であり、良質の書物とは言えないであろう。

中國の選注本三種を仔細に見ると、選詞の範圍が神田喜一郎博士『日本における中國文學』の紹介している作品に限定されており（『日本三家詞箋注』の森槐南を除き）、残念ながらこの弊に陥っていると云わざるをえない。各詞人の作品をすべて検討し、そこから選録するという選び方はなされていないのである。

ただこれは、中國の研究者にとっては、日本詩人の別集や總集を見ることが非常に困難であるという、やむを得ない事情に據るものである。特に選注本三種が重點を置いている明治以降の詞については、『鷗夢新誌』や『隨鷗集』などの雑誌に發表された作品が多く、日本

でも稀観のこれらの雑誌を中國において検することは極めて難しいと言わなければならない。現在のところ、日本詞を最も多くまた體系的に集めた書物は神田博士の『日本における中國文學』である以上、これをいわば底本として日本詞を選録するの致し方のないことであろう。むしろ問題は、『日本における中國文學』の研究水準や輯詞の範圍を未だに超えることができない、日本の研究状況にある。冒頭にも述べたように、日本漢文學の中でも特に詞については、研究者も研究成果もともに少ないというのが現状なのである。

だが研究者や成果を今後増加させていくためにも、主要な詩人の詩文集を影印または翻刻出版したり、諸書に發表された作品を輯佚するなど、研究の基礎となる文献整理の作業を行っていかなければならないであろう。信頼できるテキストを容易に入手できるという環境を整えることで、日本・中國雙方の研究者による更なる研究の進展を望むことができよう。この文献整理の仕事は、日本に住む研究者がまず取りかからなければならない大きな責務であると考ええる。

選注本の問題點の二つ目は、施されている注や説明に少なからず不充分なところがあるという點である。

たとえば『日本詞選』では、久保天隨について次のように解説している。

久保天隨、一八七五年生、卒年不詳。名得二、號秋碧吟廬主人、

信濃高遠人。(後略)

この説明に據れば、久保天隨は一八七五(明治八)年に生まれ、卒年は不詳であるという。だが天隨の死は、一九三四(昭和九)年六月

發刊の『隨鷗集』第三五六號「忘機餘話」に「遂に六月一日午前十一時五十分を以て臺北市昭和町の寓邸に長逝せらる」(佐藤小石記)と傳えられて遺影が飾られ、續く第三五七號に葬儀の寫眞が掲載されるなどのごとく¹⁹⁾、一九三四年のことである。天隨の令息・久保舜一氏は天隨の死について「昭和九年六月一日、腦溢血によつて臺北市の自宅で没した。滿六十歳に二か月ほど足りないところだった」と述べておられる(久保舜一「久保天隨」、『明治文學全集』第四十一卷『鹽井雨江 武島羽衣 大町桂月 久保天隨 笹川臨風 樋口龍峽集』所收、筑摩書房、一九七二)。「鹽井雨江 武島羽衣 大町桂月 久保天隨 笹川臨風 樋口龍峽集」には、久保天隨の詳細な年譜も附されており、その生涯を概観することができる。

『隨鷗集』の閲覧は難しかったであろうが、一九八五年刊行の『日本詞選』であれば、一九七一年刊の『明治文學全集』第四十一卷は見ることでできたはずであり、にもかかわらず「卒年不詳」と記すのは草率のそしりを免れまい。『日本詞選』が「卒年不詳」としたのは、實は『日本における中國文學』に天隨の卒年に關する記述が無いからである。神田博士はもちろん天隨の没年を御存知であったが、自明のこととして書中には記載されなかつたのであろう。全面的に『日本における中國文學』に依據したがために説明を誤っている例として、永井禾原に對する解説も引いておこう。

永井禾原、明治時代後期詩人、生卒年不詳。有《來青閣集》。

『日本詞選』は永井禾原を「明治時代後期詩人」とし、また生卒年を不詳と述べているのである。永井禾原が、嘉永五年八月二日に生まれ、

森春濤・大沼枕山・鷺津毅堂の門に學んで高級官僚から後に日本郵船の上海支店長などを歴任し、大正二年一月二日に没したことなどは、多くの日本文學辭典や人名辭典等において簡単に検することができ、事柄であろう。神田博士はこれらを既知のこととして、多くの説明を加えておられないのである²⁰。また『日本詞選』が禾原を「明治時代後期詩人」と説いているのは、載録した「水龍吟（奉答喀喇沁王、即用其原韻）」詞が明治四十四年七月發行の『隨鷗集』第八十編所收の作品であり、『日本における中國文學』の終章近くに登場するからであると思われる。

さらにもう一件、『日本詞選』における注の不備について指摘しておきたい。『日本詞選』には、本田種竹の作品として「大江東去（鴻臺懷古）」詞と「孤鸞（弔手胡奈墓）」詞の二首を録している。この二詞の序文に見える語「鴻臺」「手胡奈」について、『日本詞選』では全く注を附していないのである。

「鴻臺」とは、現在の千葉縣市川市にある「國府臺城」^{こうのたいじょう}のことで、太田道灌が築城し、後に里見氏が城主となった。戰國時代の里見氏と北條氏との鴻臺合戦の舞臺となったところである。「大江東去」詞の後関第六、七、八句に「百雉金湯、一朝荆棘、不聽風山曲」とあり、「里見氏所愛笙名曰風山」との種竹の自注が附されていて、その自注は『日本詞選』にも引かれているのであるが、「鴻臺」という語の歴史的背景を知らなければ、自注がどういう意味であるのか全く理解できないであろう。

また「手胡奈」は、手兒奈、手兒名などとも書く、傳説上の美女の

名である。下總國の眞間（現在の千葉縣市川市）に住んでいたとされ、絶世の美女であるがために多くの男たちが彼女を巡って争いを起こし、それを苦にして入水したと伝えられている。萬葉集には、手胡奈を詠んだ高橋蟲麻呂や山部赤人の歌が見える。その墓迹は現在の手兒奈靈堂に有り、近接する龜井院には手胡奈が水を汲んだという井戸も残されている。「孤鸞」詞の前関第四、五句に「茅屋牽蘿、汲井一瓶春曉」とうたうのは、この井戸を詠んだものであろう。この詞は冒頭で「竹邊門小、憶幽谷佳人、天寒心悄」と詠じおこして薄命の佳人を描いており、手胡奈の傳説を知らなくても詞として鑑賞は可能であるが、手胡奈に關する注があつた方が良いのは言うまでもない。

この「鴻臺」や「手胡奈」は、明治大正期の知識人ならば誰でも知っていたようなことであり、神田博士も特に説明を加えておられない。このため『日本詞選』ではその意味を知ることができず、注を附さなかつたのであろう。

このような注の不備は、『域外詞選』や『日本三家詞箋注』においても散見している。一點だけ『日本三家詞箋注』における例を擧げておく。

森川竹磔の「水調歌頭」詞は、下記のように美濃地方の洪水を描いた詞である。

水調歌頭

森川竹磔

八月二十三日、濃州大水、憶前年西遊、此日正在岐阜、慘然
歌商調一曲

水浸美濃國、聞説使人驚。金華山動、黃流混混與天平。失卻千村

萬落、泛盡兒童老弱、生死不分明。一半葬魚腹、誰肯弔其靈。

果何罪、仰天哭、甚無情。回頭歷歷、去年此日記曾經。三十六灣

秋冷、十八樓頭夜靜、烏鬼獲魚鳴。想見無人地、一片月光青。

前関から換頭にかけて、洪水の被害の大きさと悲惨さを描き、去年の同日の平和な情景と對比しての感慨で結んでいる。その後関第六、七句「三十六灣秋冷、十八樓頭夜靜」は、明らかに長良川を詠じた森春濤の「岐阜竹枝」詩（「環郭皆山紫翠堆、夕陽人倚好樓臺。香魚欲上桃花落、三十六灣春水來」）を踏まえた表現であり、春と秋と季節は異なっても、長良川ののどかな光景を描寫するのに効果的な典故として用いられている。だが『日本三家詞箋注』では、この春濤「岐阜竹枝」詩についての注が附されていないのである。

實は、春濤の「岐阜竹枝」詩は、この「水調歌頭」より以前に掲載されている「滿江紅」詞の注には引かれている。「滿江紅」詞は、春濤の死に際して作られたもので、その後関末四句に「春水香魚休再唱、桃花亂落紅飄瞥。料明年・三十六灣頭、鵲啼血」とあり、明白に「岐阜竹枝」詩にまつわる句を用いて、「岐阜竹枝」詩を引くのが最も適切な注釋と言えるであろう。『日本三家詞箋注』の注釋者は、ここで既に「岐阜竹枝」詩を擧げているので、後に登場する「水調歌頭」ではその詩に言及することを割愛したとも考えられるが、しかしやはり「水調歌頭」詞においても「岐阜竹枝」詩を踏まえている事實を指摘することが必要であると思われる。

また「水調歌頭」詞の後関第八句に「烏鬼獲魚鳴」とあり、『日本三家詞箋注』はこの部分に本詞唯一の注を附して、

烏鬼：《夔州圖經》云、夔峽中人以鸕鶿捕魚。謂之「烏鬼」。杜甫詩、「家家養烏鬼、頓頓食黃魚」。另一種說法、唐代風俗有祭祀「烏鬼」者。元稹詩、「病賽烏稱鬼」。自注、「南人染病、競賽烏鬼」。按、此詞是說鸕鶿捕魚亦兼有陰森如鬼之喻。

という。すなわち、「烏鬼」には「鸕鶿」つまり日本で言うところの「鵜」と、南方の鬼神の名という二つの意があり、この詞ではその兩方の意を兼ねて表現していると注するのである。

「烏鬼」が「鸕鶿」つまり「鵜」であるという注は有用であり、一般の日本人ならば長良川で「鵜」とくれば、すぐに鵜飼いのことを思い浮かべるであろう。日本の詩詞にはこのような日本の風俗が詠みこまれることがしばしばあり、この點についても注が必要である。「烏鬼獲魚鳴」という句は、長良川の鵜飼いをうたっているものであり、「岐阜竹枝」詩を踏まえた「三十六灣秋冷、十八樓頭夜靜」に續けることで、洪水が起こる一年前の平和な川面の景色を描き出しているのである。

「烏鬼」注の後半部分は不要であり、「兼有陰森如鬼之喻」というのは誤讀と言わざるをえない。

以上、選注本とその問題點について述べてきたが、先に述べたように、多少の問題點があるとしてもその價値は日本詞研究にとってきわめて高い。ここで指摘した二つの問題點は、實は日本における日本詞研究が未だ十分ではないことに起因する問題點であり、信頼できるテキストの校刊や、各詞に適切な注を加えて正確な讀解を進めていくことは、我々日本人研究者に課せられるべき喫緊の課題なのである。

おわりに

青山宏氏は、程郁綴・高野雪譯『日本填詞史話』の「序」において次のように述べておられる。

要了解日本の詞、本書以外別無它書、而且大概今後也很難出現能够超過這本書的著作。

ここで言われているように、また小稿でも繰り返し記してきたように、現在のところ神田博士の著書が日本における日本詞研究の唯一の書物であり、またそれを超える仕事は出現させることは非常に困難なことであろう。だが日本の詞學研究者として、日本の詞人に關心を寄せ、その作品や詞學を正當に評價していくことは必ず爲さねばならぬ重要な仕事であると思う。

二〇〇七年六月に出版された譚雯『日本詩話的中國情結』（中國社會科學出版社）の蔡鎮楚氏序文に次のように言う。

然而、對於日本歷代詩話整理、出版和研究、現代日本人並沒有表現出應有的學術熱情。現代化的日本民族受西方文化之影響、已經不太尊重本民族的文化傳統、也許日本人并不把日本詩話當作自己的文化傳統和寶貴財富。（中略）令人遺憾的是、在詩話文獻資料之整理、出版和研究方面、日本遠不及中國和韓國。

蔡氏は日本の詩話について述べておられるのであるが、きわめて残念なことながら、日本詞やさらには日本漢文學の研究状況についても同じことが指摘されうるであろう。昨今の漢文輕視の風潮により、日本人は益々自己の文化的傳統や貴重な遺産を顧みなくなりつつある。

日本がこのような状況にあるなかで、中國の複数の研究者や、特に近年は若い研究者が、日本の漢學や詞に關心を寄せて論文や著書を發表していることに、筆者は大きな感動を覚える。それは、夏承燾氏が一九五七年二月二十六日の日記のなかで清水茂氏の書評に觸れ、「清水君讀予書甚仔細、竝以詞學季刊所登予譜校閱、所論皆甚中肯、讚美亦無溢辭、日人治學謹嚴可見。當此國運迍邐之日、尙有人沈研學術、孜孜如此、亦令人感奮」と書いておられるのと、僭越ながら同じような氣持ちなのではないかと思う。中國の研究者による眞摯な日本漢學研究は、それを讀む日本人研究者を大いに「感奮」させてくれるのである。

日本漢文學の研究には、未開拓の分野が多くあり、特に日本詞や詞學に關する研究は、まだ緒についたばかりである。日中兩國の研究者が協力しあいながら、今後、着實に成果を擧げていくことを切に期待したい。

注

(1) 「天風閣學詞日記」は、當初「詞學」第一〜八輯と第十輯に連載され（一九三一年、一九三九年及び一九四〇年分）、後に増補されて浙江古籍出版社から、一九二八年より一九三七年までの十年を第一冊（一九八四年刊）、一九三八年より一九四七年までの十年を第二冊（一九九二年刊）として刊行された。『夏承燾集』第五〜七冊所收の「天風閣學詞日記」では更に増補され、一九二八年から一九六五年までの日記を見ることが出来る。

(2) 鹽谷溫『中國文學概論講話』は、大正八（一九一九）年に大日本雄辯會から刊行されている。張中良『五四時期的翻譯文學』（大陸學者

叢書七、秀威資訊科技、二〇〇五）に據れば、その中國語譯には、孫俚工譯『中國文學概論講話』（開明書店、一九二四）と陳彬禾譯『中國文學概論』（北平樸社、一九二六）の二種があり、夏承燾氏はそのいずれかを見られたのであろう。

(3) 今關天彭『清代及現代の詩餘駢文界』は大正十五（一九二六）年、今關研究室刊。なお本書は後に今關天彭著『近代支那の學藝』（民友社、一九三一）に載録されている。また『岡田元規之唐宋八大家醫傳』は、明治二十二（一八八九）年刊の岡田元矩『唐宋八大家醫傳』（東京・成倉屋久兵衛）を言い、「足立喜六著長安史蹟考（商務版）」は、足立喜六『長安史蹟の研究』（東洋文庫論叢第二十一・二十二、東洋文庫、一九三三）を楊鍊氏が中國語譯した『長安史蹟考』（商務印書館、一九三五）を指している。

(4) 「東方學報」所收の「漢書補注」とは、狩野直喜氏「漢書補注補一」（『東方學報』第九冊）第九冊所收、一九三八（四）を、「補宋代皇城司考」は佐伯富氏「宋代の皇城司に就いて」（『東方學報』第九冊所收、一九三八）を指す。また『尙書正義』は東方文化研究所經學文學研究室編。東方文化研究所より一九三九年から四三年にかけて八冊が刊行された。

(5) 中田勇次郎先生の「姜夔」（『青木正兒博士還曆記念中華六十名家言行録』所收、弘文堂、一九四八）、および「姜白石の梅の詞について」（『東光』第三號所收、一九四八）のこと。兩篇ともに『讀詞叢考』（創文社、一九九八）に載録されている。

(6) 清水茂氏の書評「夏承燾『唐宋詞人年譜』（『中國文學報』第五冊所收、一九五六）。清水茂氏『中國詩文論叢』（創文社、一九八九）にも收録されている。

(7) 一九八四年の「夏承燾教授從事學術與教育工作六十五周年慶祝會」の際に寄せられ清水茂氏の賀詩に「疆村贊許品詞初、群籍搜求宛委墟。老訂古今厘別字、甄綜中外顯奇書。遺珠曾獻西湖畔、高教屢蒙東海廬。久感忘年交誼厚、崑祈壯健枉籃輿」（吳無間編『夏承燾教授紀念集』所收、中國文聯出版公司、一九八八）とある。

(8) 平岡武夫氏の「唐長安城の遺蹟調査と夏承燾氏の曲江池考について」は『東方學報』第二十九冊所收（一九五九）。同論文に據ると、一九五八年十月、平岡氏のもとに夏承燾氏より私信とその「唐代長安曲江池小考」が届けられたという。林謙三氏の「尺八新考」は「大和文化研究」第五卷十一號通卷第三十一號所收（一九六〇）、「博雅笛譜考」は「奈良學藝大學紀要人文社會科學」第十九卷一號所收（一九六〇）、「伎樂曲の研究」は「南都佛教」第八號所收（一九六〇）である。「博雅笛譜考」と「伎樂曲の研究」は、後に林氏の論文集『雅樂—古樂譜の解讀』（東洋音樂學會編、音樂之友社、一九六九）にも收録された。なお「郭沫若譯其隋唐燕樂考」というのは、郭沫若譯『隋唐燕樂調研究』（商務印書館、一九三六）を指している。また入矢義高氏の書評「鄧之誠氏の『東京夢華錄注』」は、『書報』第二卷六號（極東書店、一九五九）に掲載されている。

(9) 「菩薩蠻、謝神田喜一郎教授寄贈《日本填詞史話》、一九六五年夏作」として、『夏承燾詞集』卷五（湖南人民出版社、一九八〇）に收められている。詞に「偏師一戰歸成霸、朗吟人亦從天下。槐竹各干雲、後身應是君。詞流攜履地、回首今何世。萬幟展東風、蓬萊怒海中。」という。

(10) 「四聲釋說」は夏承燾氏の論文。夏承燾氏『月輪山詞論集』（中華書局、一九七九）に收録されており、同書には「一九四一年六月初稿、一九六三年一月改」と記載されている。「四聲釋說」の初出誌については、杜海華編『二十世紀全國報刊詞學論文索引』（北京圖書館出版社、二〇〇七）を検したが、不明である。

(11) ここで挽詩を代作したという大倉喜七郎氏は、大倉財閥の二代目、ホテルオークラ・大倉文化財團の創始者でもある。

(12) 以下『日本三家詞箋注』前言は、「文獻」第十五號（一九八三）所收の文に據る。「文獻」所收の「前言」と二〇〇三年一月に澳門より發行された『日本三家詞箋注』所收のそれとは、文字に若干の異同がある。

(13) 張炎の「詞源」（卷下「清空」）に「詞要清空、不要質實。清空則古雅峭拔、質實則凝澁晦昧。姜白石詞如野雲孤飛、去留無迹。吳夢窗詞

如七寶樓臺、眩人眼目、碎拆下來、不成片段。此清空質實之說」とあり、姜夔を「清空」、吳文英を「質實」と位置づけている。

(14) 村上哲見氏『宋詞研究―南宋篇―』（創文社、二〇〇六）第四章「吳夢窗詞論」第五節「周邦彥と夢窗」参照。

(15) 夏承燾氏は「論域外詞絕句九首」において、槐南、竹隱に各一首をさき、さらに槐南、竹隱兩家を詠ずる詩を一首録しているが、竹隱については何も觸れられていない。すなわち、槐南、竹隱を稱揚する一方で、竹隱に關しては、この二家ほどには評價していなかったと考えられよう。

(16) 『域外詞選』は、「日本詞」だけではなく「朝鮮詞」（李齊賢詞五十三首）「越南詞」（白毫子詞十四首）および波斯出身の五代・李珣の詞五十四首を収めている。また『日本三家詞箋注』は、明治の森槐南・高野竹隱・森川竹磎の三家に對象を絞った選注本である。

(17) 神田博士『日本における中國文學』に據れば、森槐南は巖谷一六「題駕梁居士填詞圖」詩の評語に「駕梁填詞、小令瓣香南唐、清麗可愛。中調大調、兼擅玉田碧山之長。於作家寥寥中、獨能含商嚼徵、唱出金石之聲。可謂二百年來絕無而僅有者」と記し、また北條鷗所の「醉落魄」詞に「詩語入詞、清新可愛。（後略）」との評を附している。

(18) 遺影及び葬儀の寫眞は、森岡ゆかり著『近代漢詩のアジアとの邂逅』（勉誠出版、二〇〇八）の第一部第六章に轉載されている。

(19) 天隨の没した日について、佐藤小石氏および久保舜一氏は「六月一日」とされているが、黃得時氏「久保天隨博士小傳」（『中國中世文學研究』第二號所收、一九六二）では「六月二日」と記されている。なお久保天隨の生涯についてはその他に、芳村弘道「久保天隨とその著書『支那文學史』」（川合康三編『中國の文學史觀』所收、創文社、二〇〇二）、村山吉廣「久保天隨の生涯と詩業」（『中國古典研究』第五十一號所收、二〇〇六）、および前掲森岡ゆかり『近代漢詩のアジアとの邂逅』に詳しい。

(20) 『日本における中國文學』には何度か永井禾原の名が登場するが、神田博士はその「百十九、填詞の衰頹時代（二）」において、「禾原、名は

久一郎、尾張の人である。その文豪荷風の父であることは、前に「森春濤門下の填詞作家」を述べた際に、すでにわたくしの一言觸れておいた所である。夙く官に仕へて文部次官まで榮進したが、明治三十年三月に挂冠、日本郵船會社の上海支店長として同地に赴任した」とやや詳しく解説されている。ただし禾原の生卒年には觸れておられない。

〔附記〕

小稿は、二〇〇八年九月十七日の武漢大學文學院における講演原稿に基づき、増補・改訂を加えたものである。